

『源氏物語』と『トゥリスタン物語』

その比較検討（1）——成立と構成

天澤 衆子*

The Tale of Genji and The Tale of Tristram (1)

Shuuko AMAZAWA

Given the great distance, both culturally and geographically, between Japan and Europe, it can be surprising to find parallels in literary heritages. In medieval stories of courtly love, a number of similar features are shared by *The Tale of Genji* (*Genji-monogatari*), written by Murasaki Shikibu somewhere between 1000 and 1013, representing an historical account of court life in the Heian Period, and the Tristram cycle, which was possibly written by several bards in France and England between 1137 and 1230.

1. Both tales flourished in a glorious culture of dynasties. In other words, *The Tale of Genji* was read aloud in the court of Emperor Ichijo and Empress Shoushi, and the Tristram story was sung in the French courts of Louis VII, Eleanor of Aquitaine, Henry II, the queens of Philip-Augustus and Saint

*あまざわ・しゅうこ：敬愛大学国際学部非常勤講師 中世フランス文学
Part-time Lecturer of French Literature, Faculty of International Studies, Keiai University.

Louis, and so on. In addition, both tales were developed in a similar way, in that they were constantly circulated, handed down by many people, and transformed into many different versions, before being gradually linked up with each other and developed into one story. For example, Murasaki Shikibu wrote *The Tale of Genji* referring to *The Tale of Utsuho*. On the other hand, in Europe, the Tristram story called *Estoire* was written, after *Historia Regum Britanniae* (1137) and *Roman de Brut* (1155), by an anonymous *trouvère*, a poet and also a composer. *The Tale of Genji* has two versions, one known as the Kawachi Book version and the other as the Blue Book version. That is similar to what Bédier proposes, namely that *Estoire*, a tale of the Tristram cycle, developed into two versions, “version commune” and “version courtoise”. In this manner, *The Tale of Genji* and *The Tale of Tristram* were developed alike.

2. Both tales were meant to be read aloud, recited, or chanted. In Japan, the tale was read aloud by a court lady with a beautiful voice, in front of the emperor and empress. In Europe, the romance was chanted by a *jongleur* with a musical instrument at court in front of the king, the queen, and a large audience. *The Tale of Genji* is different, inasmuch as it was read aloud, from *The Tale of Heike*, another famous tale that was sung with the *biwa*, a Japanese guitar. But what I want to consider is that it was read aloud to an audience. In Europe, *The Tale of Tristram* was chanted by a *jongleur*.

It is very important to focus on the presence of a narrator. The sudden appearance of a narrator in the tales can be seen quite often in both *The Tale of Genji* and *The Tale of Tristram*. The appearance of a narrator might be proof that they were not read privately but read aloud and chanted. At the same time, a narrator plays an important role in that it relativizes and theorizes these narrating tales and in the end allows new themes to be interwoven into the stories.

3. Both tales have other similar points, as follows:
 - a. Both Genji and Tristram lose their mother in childhood, growing up to be shining handsome men, highly talented musicians with a courtly education.
 - b. They both fall in love with a married woman, whose husband is closely related to them.
 - c. Each has two lovers whose characters appear to be

complementary.

d. Each believes in God and is blessed with the grace of God.

e. Each has a servant who is smart, always faithful to them, and helps with their assignments.

f. Each is banished when their illicit affair is discovered, causing them many difficulties.

Lastly, I would like to examine more briefly other similarities between these two tales, such as their organization, and consider the true meaning of these two texts that flourished in such different places but at almost the same time.

はじめに

日本で紫式部により、1001年ころに書かれたとされる恋愛を主にした宮廷歴史物語である『源氏物語』と、フランスやイギリスで1137年から1230年にかけてさまざまな吟遊詩人により書かれたと推定される、恋愛を主題にした宮廷物語である『トゥリスタン物語』(*Le Roman de Tristan*) 群は、極東の小さな島日本とヨーロッパという離れた場所、異なった文化にありながら、とても似通った点を持っているのに驚かされる。

まず、両者とも、華麗なる王朝文化の中で花開いた文学であるということである。例えば、源氏物語においては、一条天皇と中宮彰子、トゥリスタン物語においては、ルイ7世 (LOUIS VII)、アリエノール・ダキテーヌ (ALIÉNOR D'AQUITAINE)、アンリ2世 (HENRI II)、フィリップ・オーギュストウ妃 (RÈGNE DE PHILIPPE-AUGUSTE)、サン・ルイ9世妃 (RÈGNE DE SAINT LOUIS IX) などである。

第1章 物語はいつ、どこで作られたか

1. 源氏物語の成立

その時代背景

源氏物語創作の時代背景としては、それまで咲き誇っていた外国文化の衰退、これに呼応したかたちでの国風文化の開花があげられる。607年に小野妹子らが遣わされて始まった遣隋使に引き続き、高句麗に滅ぼされた隋に代わって起きた唐との関係を保つために遣唐使が遣わされていた。当時朝鮮半島では絶えず、高句麗、新羅、百済の3国で争いが繰り返され、負けた国の人々は、大陸文化の影の色濃く残る彼らの文化と共に倭の国へ亡命をするのが常であった。

寛平6年(894年)に大陸からの文化移入の手段であった遣唐使派遣が廃止された。これは、唐国が衰微していることに加え旅の危険などをかんがみ、日本にとっては朝貢に過ぎない遣唐使廃止を、菅原道真が上表して許された結果であった。これにより、大陸からの文化的影響は激減した。それまでは、絶えず大陸文化の模倣に走っていた日本人に、独自の文化を作ろうとする意欲が現れ始め、国風文化発展の気運がみなぎってきた。「高さ5尺の屏風には唐絵を描き色紙型しきしがた(絵のそこここに張る紙)には漢文詩を、高さ4尺の屏風には大和絵を描き色紙型みそひともじには三十一文字を描く。姫は屏風に描かれた絵を見ながら、側に侍する女房に説明を求める。これが物語の起こりであった」⁽¹⁾。詩を作るなら漢詩、絵を描くなら唐絵という風潮は、やがて女子供のものと蔑まれていた和歌や大和絵へと移行していく。そのころ、倭の国は、固有の文字を持たず、漢字をそのまま音読しその意味とは無関係に記述した。それが、いわゆる万葉仮名である。その後、漢字の訓を用いて表記する字訓仮名という方法も現れた。しかし、両者共表記はあくまでも漢字であった。『万葉集』は、このような万葉仮名(真仮名)により書かれており、この万葉仮名は奈良時代の終わりには次第に崩れた画

数の少ない字体に変化し、平安時代（794年～）にはいよいよ簡略化された草書体が用いられるようになる。もっとも、公の場では今まで通り漢文、漢詩だったが、女子供は、草書体を更に簡略にしたいいわゆる「女手^{おんなで}」を書くのが主流になる。9世紀末、これが「ひらがな」の誕生であった。延喜5年（905年）に、醍醐天皇が紀貫之らに勅して編集させた『古今和歌集』が、「やまと歌」の表舞台への登場であり、これこそが、男によって公に女文字がわが国固有の書き言葉に認定された革新的事件であった。

「摂関政治は、天皇の母方の親族が摂政や関白として政権を握る政治形態であり、複数の妃のなかで、誰が天皇の寵愛を得て皇子を生むかが、どの男が摂政・関白になるかを左右する」⁽²⁾。天皇に自分のお寝所に足しげくお出まし願えるように、知恵をしぼったあげく思いついたのが、女御、更衣らによる楽しい知的音楽サロンであり、女流宮廷文化の誕生であった。この、妃同士の頭脳競争こそが、平安女流文学の黄金時代をもたらした。

そんな時代に現れたのが、わが紫式部であった。

源氏物語の起源

源氏物語がいったいつ作られたかについて、唯一確実な事実は、寛弘5年（1008年）11月1日に、「若紫」の巻が書かれ発表され朗読されていたことだけである。また同日、藤原公任が紫式部に「わかむらさきや侍ふ」（若紫のような可憐な少女はいないか？）と聞いたことが記述されていることから、このころすでに源氏物語が執筆され流布していたことが推定される。同年暮れころ出産をすませた中宮彰子が、宮中に帰還するに際し、源氏物語らしき物語冊子を幾人もの女房に書写させたとも伝えられている。こういった事実以外には残念ながら、詳しい資料は残されていないが、「物語には、^{うる}原源氏物語が存在していた。藤壺との始めてのあるいは数回の密会、六条の御息所との巡り合い、こじれた原因などが書かれたものが『^{うる}原源氏物語』であったと推測される」⁽³⁾。

こういう類いの物語は、王朝貴族社会にほとんど氾濫状態で流布していたらしいことが『三宝絵』序文に書き記されており、それらは女子供のおもちゃとして、読み捨てられ消えていった。しかし、「物語のいで来はじ

めての祖」と言われた『竹取物語』をはじめとして、ほか若干の物語が現存しているのは「それらが、卓越した達成度を示して人々の感興を誘発したために伝写され続け、後世に生きのびることができたのであろう」⁽⁴⁾。

このように、この物語は、紫式部以前に伝わる多様な光源氏のもの（原源氏物語）を前提に書き継がれたものだろうと推定される。またおそらく、紫式部の持ち合わせた知識による加筆と思われる、様々な過去の読み物たちの影響も色濃く残っている。例えば、遠くにあつては司馬遷が書いた中国初の歴史書『史記』、『後漢書（清阿王慶の伝）』、初唐の張文成の短編『遊仙窟』、近くにあつては『宇津保物語』などである。

ながく漢詩がもてはやされ、仮名の文学は学問とは見なされてはいなかった時代に、紫式部の書いたこの『源氏物語』は初めて、男にも文学作品と認められた女房言葉の仮名物語であった。『史記』を始め前出の中国の書物を読破した紫式部ならではの長大な仮名物語であり、おそらく当時の読み物にしては漢の影響の色濃く残る物語ではあったが、その物語の長さといい、筋の面白さといい、筆使いの見事さといい、わが国始まって以来の画期的な文学作品であった。

物語の構成という点でいうと、『源氏物語』は従来〈光源氏を中心とする部分〉と〈薫大将を中心とする部分〉に分けられ、正篇（または前編）・続編（または後編）と呼ばれてきた。しかし、それよりも、前編を二分して、全体を第一部・第二部・第三部とするのが、池田亀鑑をはじめ大方の説となっている。この第一部について、武田宗俊は次のように言っている。

「第一部は二系列の物語を組み合わせたものである。一方の物語は長篇的構成を持ち、光源氏とその恋人藤壺・紫の上、明石御方との関係を中核とし、これに葵上・六条御息所・朧月夜尚侍・花散里・朝顔齋院等と源氏の恋物語を錯綜させたもので、これが第一部の本筋をなしている。今一方は、短篇的な説話をつらねたもので、主人公光源氏と空蟬・夕顔・末摘花・玉鬘等の恋愛関係を描いており、各箇の説話は一見ばらばらのようであるが、それ等の説話のすべては一つの源、帚木の巻の雨夜の品定めから出、

相関連して又一の統一を保っている。今更宜上前の長篇的な物語を、中で特に重要な女主人公によって、紫の上系と名づけ、後者を同じく玉鬘系の物語と名づけることにする」⁽⁵⁾。

ちなみに、長篇的構成を持ち、第一部の本筋をなすグループは、「桐壺」巻以下の紫の上系17帖（桐壺、若紫、紅葉の賀、花宴、葵、賢木〔榊〕、花散里、須磨、明石、滯標、梅枝、藤裏葉、絵合、松風、薄雲、朝顔、乙女）であり、短篇的な説話をつらねたグループは「帚木」以下の玉鬘系16帖（帚木、空蟬、夕顔、末摘花、蓬生、関屋、玉鬘、初音、胡蝶、螢、常夏、篝火、野分、行幸、藤袴、真木柱）であり、合計33帖が第一部をなす。

第二部は若菜上の巻から幻の巻までの8帖、第三部は匂宮以下夢浮橋までの13帖で、第一部、第二部、第三部の合計54帖である。なお、第三部は源氏の没後遺族たちの後日談をつなぎにして、その子薫が愛と神との迫間をさ迷う物語で、後にその地名から宇治十帖と名づけられた。

一方、テキストの異本に目を向けると、紫式部日記には、源氏物語の伝本として、一条天皇への献上本、中宮彰子本、手もとに残された本などと、すでに複数の伝本の存在が確認できる。それに加えて「草書、中書、清書などのたがひめある歟」（一葉抄）と、源氏の本文も一本に固定した存在ではなかったとなると、その伝来たるやきわめて混沌としてくる。鎌倉期に光行、親行の親子二代で校訂された河内本は21部の本文を用い、そのうち有力な伝本の「八本をもて校合取捨して家本とせり」とある。親子が20年の歳月をかけ、これとあわせて注釈書も作成、しかし、諸本を校訂して一本を作成したが、読みやすくなった分だけ、むしろ原典から離れていく危険性が高く、河内本の評価が低いのもこの理由による。おなじころ、藤原定家が54帖の『源氏物語』揃い本を手にする。これは定家が書写し青表紙本として流布する。鎌倉期から室町中期までは河内本が優勢で、その後、宗祇、実隆になって青表紙本の評価が高まり、河内本は大正期に再発見されるまで陰をひそめる。昭和7年、池田亀鑑を中心にして『校本源氏物語』の原稿が完成し、本文を1「河内本系統の諸本」、2「青表紙本系統の諸

本」、3「青表紙・河内本以外の諸本」の三つに分類した。ところがなんとその後、昭和5、6年佐渡の某家から源氏物語の原稿が出現したのである。これを、大島雅太郎が入手、この原稿が定家本をかなり忠実に継承した伝本と知り、10年後の昭和17年10月、全面的に底本を大島本に改め直した『校異源氏物語』が刊行された。その後資料編など加えて8冊にした『源氏物語大成』が昭和28から31年にかけて出版され、今日のテキストの基本的な資料となった。3の「青表紙河内本以外の諸本」に分類されている物の中には、屏風絵などで、1でも2でもない文章が書かれていたりすることで知られる。また代表的な別本には陽明文庫本がある。

ところで、作者紫式部について少し考察を加えてみたい。『枕草子』を書いた清少納言の父は清原元輔、梨壺の五人の一人三十六歌仙の一人、後選和歌集の編集者の一人であった。一方、紫式部の父、藤原為時は『本朝麗藻』^{ほんちょう}を残している、一流の漢詩人である。一条帝の宮廷において、清少納言は皇后定子の後宮に、紫式部は中宮彰子に出仕した。皇后と中宮は共に、第一皇妃の資格がありライヴァル同士であった。式部が彰子に出仕したときすでに、定子は崩御（長保2年〔1000年〕）していたが、亡き皇后定子近くに侍っていたライヴァル清少納言はうぬぼれやであり、陽気かつ男好きであったのに対し、中宮彰子に仕える紫式部は謙虚、陰気、孤独であったことは、枕草子や紫式部日記などからも推測できる。

式部は29歳（今井説）で宣孝と結婚し、翌年長女賢子を出産する（ほかに26歳〔岡説〕）。ほどなく夫に先立たれ（長保3年〔1001年〕）、夫の死後、源氏物語を書き始める。また一説では夫の存命中からすでに、書き始めていたとも言われる。そして寛弘2年（1005年）12月29日（ほかに寛弘3年同日説あり）中宮彰子に出仕する。すでに源氏物語の作者として有名だったことから、彰子の父藤原道長による再三の要請によるものであったが、式部としてはいやいやながらの初めての宮仕えであった。

一条天皇は彰子に対してはそれほど引かれていたわけではなかったが、源氏物語の続きが聞きたくて、頻繁に彰子のもとに通ってきたとも言われ

ている。この、天皇を呼び寄せるための皇后の努力が王朝文化の発展に多大な寄与をしたのである。式部も清少納言もこのようなはっきりとした目的意識を持って文学活動に励んでいたのである。

そのころの物語は、声を出しての読み聞かせが常であり、式部の源氏物語は寛弘3、4年から後宮にもてはやされ、執筆と同時に並行して読まれたようである。寛弘8年(1011年)一条天皇が崩御し彰子が枇杷殿に移るが、式部も一緒に女房として同行し、長和2年(1013年)秋まで出仕は続いたと言われる。長和3年(1014年)春ころ死去したと伝えられるが、御歳45歳とする今井氏と42歳とする岡氏と意見が分かれている。

2. トゥリスタン物語の成立

その時代的背景

現在のフランスにほぼ相当するガリアは、西暦前50年代、カエサル率いるローマ軍に征服されケルト語を捨て、ラテン語を話すようになる。この地にガロ＝ロマン文化が開花し、それもやがて西ローマ帝国が476年に北方より侵入したゲルマン系サリ＝フランク族により崩壊し、フランク王国(486―987年)にとってかわられる。しかし、文化的にはレヴェルの高かったラテン語は依然として書き言葉として残り、侵入者のゲルマン語はラテン語の崩れた形の話し言葉ロマンス語を駆逐することはできなかった。5世紀以降何世紀もの間に、西フランク王国は他のロマンス語地域と比べて、はるかに進んだ進化を遂げるにいたる。一方南ガリア地方の言語は、出発点であった俗ラテン語にずっと忠実であった。このようにして、南フランスではラテン語に近い「オック語(LANGUE D'OC)」が、北フランスではゲルマン語の影響の強い「オイル語(LANGUE D'OIL)」が使われるようになり、今のフランス語の元となった。

アキテーヌ公ギョーム9世(GUILLAUME D'AQUITAINE IX)が、十字軍に加わり聖地を目指したのは1102年のことであった。彼は戦いに破れ、十字軍がそもそも聖戦という名の侵略戦争にすぎないと悟ったとき、帰国して詩人になる。1100年ころから13世紀末にかけて、南フランスではオッ

ク語のコイネ (coine、いわゆる文学共通語) で詩作する詩人兼作曲家 (別号吟遊詩人) をトゥルバドゥール (troubadour) と呼んだが、この、ギョーム・ダキテーヌこそ現在名が残る最古のトゥルバドゥールであった。一方で北フランスのオイル語で詩を作り作曲する人はトゥルヴェール (trouvère) と呼ばれた。いわゆる旅芸人ジョングルール (jongleur) は小さな豎琴を持ち、始めは歌謡曲や民謡など奏でていたが、それは詩人たちに多くのインスピレーションを与えた。また教会の典礼歌などにも影響されて吟遊詩人は詩を作り節をつけた。彼らにより作り上げられた韻文長編詩を、ジョングルールたちは次第に覚えるようになった。おかげで、これらの作品は、彼らと共に諸国を旅して広まったのである。

これらの、吟遊詩人たちの好んで歌った主題は「フィナモール (至純の愛)」であった。この愛とは、身分の高い既婚女性に恋をした、身分の低い恋する男 (多くは騎士) が、身も心も捧げ、この意中の女性に徹底的に服従をして、数々の試練や冒険に立ち向かっていく、しかもふたりの愛の秘密は絶対に漏らしてはならないという、ハードなものであった。

「女性蔑視的色合いの濃い中世社会に突如出現したこの女性優位の思想は、封建領主とその家臣の関係を、女領主とその騎士との関係へと転移させたものであるが、その起源は謎に包まれている」⁶⁾。

1137年ギョームの孫娘アリエノール・ダキテーヌはトゥルバドゥールたちを引き連れてフランス王ルイ7世に嫁ぐが、気が合わず1152年離婚する。同年アンジェー伯、ノルマンディー公アンリと結婚、そのアンリが1154年イングランド王ヘンリー2世になったことで、吟遊詩人たちは英仏海峡を渡ることになるのである。

物語の起源

1137年にジョフレ・ドゥ・モンムット (GEOFFREY DE MONMOUTH) の書いたラテン語の書ブリタニア王列伝 (Historia regum Britanniae) をヴァース (WACE) はアングロ・ノルマン語に翻案した。この創作歴史物語、ブリュ物語 (Roman de Brut) が、1155年、王妃アリエノールに捧げられた。この作品は、ブルトン人の祖先が、ローマ人ブルトゥスにほかならない

ことを証明しようとしたものではあるが、そこに原作にはなかったアーサー王と円卓の騎士たちの創作物語をこの歴史物語に混交させた。その結果この物語は大ヒットを遂げる。イギリス王家の祖先とされたこの「ブルターニュもの」と呼ばれる、アーサー王と円卓の騎士たちの物語はこれ以後飛躍的に伝播した。

G・シュェッペルレ (GERTRUDE SCHOEPPERLE) によると、800年ころ、『コーマックの娘グライーネとドゥイネの孫ディアミッドの駆け落ち』(Aithed Grainne ingine Corbmaic la Diarmaid ua n-Duibni) という、アイルランドの駆け落ち物語の存在が確認されている⁷⁾。一方、1115年ころから、トゥリスタン、イズー (YSEUT, ISEUT) などの名前が存在したことが知られている。トゥリスタンはピクト人 (スコットランドとノーザンブランドとの国境に住むゲリック語を喋る部族) の名前、ブランガン (BRANGIEN, BRENGAIN)、リヴァラン (RIVALIN, LIFALIN)、ゴーヴェルナル (GOVERNAL, GORNEVAL)、カエルダン (KAHERDIN, KAERDIN) などケルト語の名前、さらにマルク (MARC, MARCK) は「馬」を意味するケルト語、イズーはアイルランド人の名前であること、物語の舞台がコンウォールやウェールズであることなどから、この伝説の起源はアイルランドやスコットランドに求められよう。それらが南下し、フランスのブルターニュに渡り、後半の「白い手のイズー」などの重要なエピソードが付け加えられたらしい。

現に、マリー・ドゥ・フランス (MARIE DE FRANCE) は耳で聴いたブルトン語の歌物語をフランス語の詩文に書き綴ったと、『すいかずらのレー』(Le Lai du Chèvrefeuille, 1165—1176年ころ) に自ら記している。

ベルナル・ドゥ・ヴァンタドゥール (BERNARD DE VENTADOUR) というリモージュ (Limoges, フランス中部の都市) のトゥルバドゥールが、トゥリスタン物語に似た物語を歌っていたらしいのが1140年ころのことである。1150年ころ、「エストワール (Estoire, ストーリーの意)」と呼ばれる『^{うる}原トゥリスタン物語』が書かれ歌われていたとされる。アンヌ・ベルトゥロ (ANNE BERTHELOT) によると、トマ・ダングルテル (THOMAS

D'ANGLETERRE、イギリスのトマの意)が、はじめてトゥリスタンを發表したのは、1173年ころである。12年後の1185年ころ、ベルール(BÉROUL)もこれを發表する。トマ、ベルール共に、物語の後半部分が断片として残存しているのみで、残念ながら前半部分は欠落している。ほかに、現存しないものとして、クレティアン・ドゥ・トゥロワ(CHRÉTIEN DE TROYES、トゥロワのキリスト教徒の意)が自分の作品の『クリジェス』(Cligès、1176年ころ)のプロローグの中で、「マルク王と金髪のイゼー」(Dou roi Marc et d'Iseut la Blonde)について書いたと言及されているし、『狐物語(Roman de Renard)』で言及された、ラ・シェーヴルの『トゥリスタン』などがある。ほかにおそらくフランス語からの訳と思われる、ドイツ語の本もアイルハルト・フォン・オベルグ(EILHART VON OBERG、1175年ころ)とゴットフリート・フォン・シュトラスブルグ(GOTTFRIED VON STRAßBURG、1210年ころ)により作られた。

今世紀初頭、ジェゼフ・ベディエ(JOSEPH BÉDIER)、W・ゴルター(GOLTHER)、G・シュェッペルレらは、トゥリスタン物語群を1「流布本系統」と2「宮廷本系統」に分類した。流布本系統には、ベルール、アイルハルトのトゥリスタン、物狂いトゥリスタン・ベルヌ本(FOLIE TRISTAN DE BERNE)、宮廷本系統には、トマ・ダングルテール、その翻訳ロベルト(ROBERT)のトゥリスタン・サガ(la Saga af Tristram ok Isönd)、ゴットフリート・フォン・シュトラスブルグのトゥリスタンとイゾルデ、物狂いトゥリスタン・オクスフォード本(Folie Tristan d'Oxford)である。そして、さかのぼるとその元に、ベルールが2度言及している種本が存在し、現存するフランス、ドイツのすべてのトゥリスタン物語は、ジェゼフ・ベディエがエストワールと命名したこの『原トゥリスタン物語』から派生し、ドイツのアイルハルト・フォン・オベルグの物語が数あるトゥリスタン物語の中でも、これにかなり忠実であろうと結論づけた。この、エストワールは12世紀に、天才詩人によって定型詩の形で作られたとベディエ、シュェッペルレらは考えた。この「流布本系統」と「宮廷本系統」はまさしく源氏物語の「河内本系統」と「青表紙本系統」との関係に酷似している。

さて、源氏物語が11世紀後半から主に和歌を詠む人の間で盛んに享受された後、12世紀初め堀河天皇の時代から広く一般に普及したように、ヨーロッパでは13世紀に入り『散文トゥリスタン物語』(Roman de Tristan en Prose)により、爆発的にヒットする。この時代、散文トゥリスタンの膨大な作品群は次々に現れた。異本が異例に複雑で混み入っているために内容が盛りだくさんすぎて複雑という嫌いがある。例えば、ある本では、マルク王はモルガンにもらった毒を塗った槍でトゥリスタンを殺してしまう、などという荒唐無稽な話まで飛び出してくる。

源氏物語にも、屏風絵に違うテキストが書かれていたり、陽明文庫本などに、桐壺帝や桐壺の更衣にひどく同情的なテキストなどがあるように、例えば、トゥリスタン物語のトマにおいては、ケンブリッジ断片を始めとして、ストラスブール断片、トリノ断片、ドゥース断片、スニッドゥ断片、などがある。また、物狂いトゥリスタン・ベルヌ本においても近年ケンブリッジ断片が発見され、さらにはベンスキン (M. BENSKIN)、ハント (T. HUNT)、ショート (I. SHORT) の三人組が、1924年に刊行された写本の中に、トマの未発見の断片を見つけだし、これをカーライル断片 (Carlisle) と名づけ、『ロマニア』(ROMANIA、1992—95年号、289—319ページ)に発表するというような事件がつぎつぎ起きている。これは、日本で昭和初期に佐渡で発見され、後にその所有者の名から大島本と名づけられた青表紙の源氏物語とパラレルな関係にあると言ってよいだろう。

更に、フランスにおいて、ベディエは、研究の一方でこれらの物語の断片を組み合わせて、20世紀の新しい『トゥリスタンとイゼー物語』(Le roman de Tristan et Iseut)を1946年に作った。また、ゴットフリートを元にしたワーグナー (RICHARD WAGNER) の楽劇『トゥリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde、完成1860年、初演1865年)はあまりにも有名である。

結論として、様々な伝承された話を一つの物語に集結させたのが、日本においては『源氏物語』の作者の紫式部、ヨーロッパにおいては『エストワール』の作者の天才詩人であることが確認された。しかも、それがまた伝承されていく過程で、日本で源氏物語においては「河内本系統」や「青

表紙本系統」、「その他の系統」などいろいろな形に変貌を遂げるように、エストワールは「トゥリスタン物語流布本系統」や「トゥリスタン物語宮廷本系統」という形に変貌を遂げたのがヨーロッパであると言えよう。

第2章 物語はどう語られたか

1. 耳から聴く物語

二つとも読む文学というより、語り聞かせの文学であるということに注目したい。ヨーロッパでは宮廷において、吟遊詩人は王、王妃を始めとして、回りに集まった下々に、豎琴などの楽器をかき鳴らしながら、日本では、天皇、皇后、女房などに、声の美しい女房が大きな声で朗読をしたのが、これらの物語である。

『源氏物語』は、読み上げた物語であるという意見があるのですね。そして物語り音読論は正しいだろうと私は思うのです。ですが、読み上げたということは決して、それは語り物ではないのだということを、明らかにしたい。つまり『源氏物語』は、物語であるから、確かに語ったには違いないけれども、語りというのはふしをつけて『平家物語』を、びわに合わせて語るということで、そういう意味の語りではない⁽⁸⁾と、大野晋は玉上琢彌の音読説に首をかしげる。大野がさらに不思議がるのは、源氏物語において、繰り返しが少ないことである。つまり、暗唱するには覚えやすいように、繰り返しが必然的に多くなるはずであるから、というものである。この観点からすると、トゥリスタン物語と源氏物語は違うものになってしまう。しかし源氏物語において玉上琢彌が提唱した、物語は声の良い女房に語られたという説は、今日多くの支持者を得ており、筆者もこれに大いに賛同するものである。

「ウエイルズの語り手は、いつ、どこで、トリスタンに関する悲恋のこの物語を、フランス語（あるいはアングロノルマン語）で、誰の前で、ポワチエ伯なる大名の前でか、それとも、その孫娘アリエノールと、後にヘン

リ2世となるアンジェー伯家のアンリと共に、ロンドンの宮廷で語ったのか、そしてその語り手は、手に書かれた物語を持っていたのか、そういったことは、一切が朦朧としてさだかではない⁽⁹⁾。しかし、トゥリスタン物語では多く、豎琴などをかき鳴らしながら、吟遊詩人が宮廷などで歌ったとされている。もちろん、その際、テキストを見たのか見なかったのかは不明であるが、ごく普通に考えると暗譜していたものと思われる、何故なら、楽器を奏でながらページをめくるのは困難だろうし、トゥリスタン物語の文章は同じ音節数で、韻文であるため韻を踏み、繰り返しが多く覚えやすくなっているからである。この点ではむしろ、平家物語との類似が指摘されるべきだろう。

日本においてもヨーロッパにおいても、物語と呼ばれる作品は、至るところに散乱していたが、そのうち質の劣悪なものは自然淘汰されていった。数少ない物語が後世に生きのびることができたのは、抜きん出て素晴らしい作品だったために伝写され続けたのだと言えよう。この『源氏物語』も『トゥリスタン物語』がヨーロッパ人に愛され、伝承され続けたのと同様に、その作品の完成度の高さゆえに、日本人の間に広まり様々な写本が作られ何世紀にも渡って伝承されていったのだろう。

2. 何故語り手が登場するのか

文章というものは、書くにせよ語るにせよ、まず、会話の文章と地の文章とに分かれるのがふつうであるが、この源氏物語においても、トゥリスタン物語においても、語り手がときどき前面に登場し意見を述べる、語り手による「呼びかけの文」というものが存在する。つまり話の途中にいきなり語り手が出現し、自分の意見を述べる。

例えば、夕霧が玉鬘と源氏が親しそうに歌のやり取りをしている様を立ち聞きしているところで、最後に「聞き違えだったのでしょうか、何にしても外聞のよいお言葉ではなかったようです」(資料G-1:「野分」、寂聴訳、第5巻、91ページ)と、語り手が介入し意見を述べる。これを中近世源氏注釈書は「草紙地」と呼びならわしている。

この「草紙地」とそれ以外の文との関係は『源氏物語』と『トゥリスタン物語』においてその類似が極めて顕著である。「草紙地」を探すと、次のようである。

『『なくなった女も、今日別れ去る女も、行く道はそれぞれにその行方知れない寂しい秋の暮れがたよ』やはり、こういう秘密の忍ぶ恋は何かにつけ苦しいものだったと、御自身のお心に、しみじみおさとりになられたことでございましょう』に続いて、「このようなくどくどしいお話は、源氏の君がつとめて秘し隠ししていらっしゃったのもお気の毒なので、これまですべてをお話するのは控えておりましたのですけれど、『いくら帝のお子だからといって、それをすべて知っている者までが、まるで傷ひとつないようにほめてばかりいるのはおかしい』と、この物語をいかにも作り事のようにおっしゃる方もおありでしたから、仕方なくありのままに語ってしまいました。あまり口さがないとお咎めは、まぬがれないこととございましょうけれど」（資料G-2：「夕顔」、寂聴訳、第1巻、192ページ）と、語り手は結語を述べる。

また、末摘花の最後のところで源氏の君があまり末摘花のことを「紅の花ぞあやなくうとまるる梅の立ち枝はなつかしけれど」[紅の花の咲く梅の枝はなつかしいが赤い花を見ると、あの人の赤鼻が思い出されいやになってしまう]と読んだ後で「こういう方たちの行く末は、果たしてどうなりますことやら」（資料G-3：「末摘花」、寂聴訳、第2巻、52ページ）と作者が介入する。ほかに頭の中將が色好みないしのすけの典侍と出来てしまったけれど、彼女はやっぱり源氏が好きだという後に続けて「何とまあ年甲斐もなく贅沢な好みですこと」（資料G-4：「紅葉賀」、寂聴訳、第2巻、83ページ）と、皮肉る。

そして玉鬘の姫君に、源氏の君が「本当にこれほど深い愛情のある者は、めったにいるわけではないと思えばこそ、あなたのことが心配でならないのです」とおっしゃいます。なんとまあ、お節介な親心もあるものですこと[いとさかしらなる御親心なりかし]（「胡蝶」、寂聴訳、第4巻、244ページ）と、源氏の君を非難し、さらに、そっけない返事を受け取った源氏の君が「これなら恨み言を訴える手応えもありそうに思われるのも、ほんとうに困っ

たお心ですこと」(資料G-5:「胡蝶」、寂聴訳、第4巻、248ページ)。

そして蓬生の最後には、次のように長文の草紙地が入る。源氏が明石須磨で暮らしていたとき、末摘花がみじめな生活をしていた。そこへ源氏が都にもどり末摘花を思い出して再会したあとの作者はこう語る。「あの大弐の北の方が都に上って姫の御運を知り、驚く様子や、侍従が嬉しいものの、もうしばらくお待ち申さなかった考えの浅さに顔も出せない思いをした様子などを、もう少し、聞かれずともお話ししてあげたいのですが、とても頭が痛くうるさく気が進まないで、今後またついでのある折に思い出して申しあげましょう、とか言うことです」(資料G-6:「蓬生」玉上訳、第3巻、342ページ)。

さて、『トゥリスタン物語』ではどうなっているのだろうか？ 物狂いトゥリスタンではオクスフォード版にも、ベルヌ版にも語り部は登場しない。マリー・ドゥ・フランス『すいかずらのレー』では次のようである。

『すいかずら』と名付けられたレーの、

正確なお話を皆様にお話しすること、

また何故そしてどのようにしてこのお話が作られたのか、

物語の起源はどうだったのかなどの謎を解くこと、

そのために日夜努力を惜しまないのは、わたくしの至上の喜びです。

そのお話は何人もの人が、わたくしに語り聞かせてくれましたし、

わたくし自身も書かれた本の中で、見つけたものです。

トゥリスタンと王妃について、

ふたりの、『本当に純粹無欠な愛』(フィナモール)について。

ふたりはこの愛のために大変な苦しみを味わわねばならず、

そしてこのために、ふたりとも同じ日に、死ぬこととなったのでした』(資料T-2:「すいかずらのレー」1~10行、213ページ、PLÉIADE 以下同)。

また、ベールールにおいて、トゥリスタンとイズーの二人が小人の罠にはまりベッドインした証拠を発見されたとき、語り手が嘆く「ああ、神さま！

王妃様がベッドから(血のついた)シーツを剥がしておかなかったなんて、返す返すも残念なことでございます！ そうすれば、ふたりとも現行犯逮捕されること

はなかったでしょうに！ 王妃様がそれを思いつかれたら、名誉を守ることができたでしょうのに！ けれども、神様の思し召しで、お二人をお救い申し上げるために、大いなる奇跡が必要でした」（資料T-3：ベルール、750～756行、23ページ）。

また、イズーとトゥリスタンが火あぶりにされることになったとき彼は叫ぶ。「ああ神様！ 彼らは、なんて汚い卑劣なやり方を、するのでしょうか！」（資料T-4：ベルール、900行、27ページ）。

イヴァンという癩病病みにイズーが引き渡され、その仲間たちと森に連れて行かれるところを、トゥリスタンとゴヴェルナルが助け出しに行く。その後に語り手が介入する。「はしたない語り部たちが、彼らがイヴァンを殺させた（溺れさせた）とかほざいておりますが、彼らは本当の話をよく知らないのです。私ことベルールは、しっかり記憶しておりますが、トゥリスタンさまはこのような者を手打ちにするには、あまりにも気高く、騎士道精神に満ち溢れ過ぎておられました」（資料T-5：ベルール、1265～1270行、36—37ページ）。

また、ほかのところでトゥリスタンとイズーのことを「ベルールの読んだ種本（エストワール）で、語られておりますところでは、こんなにも激しく愛し合い、しかもこんなにも高い代償を支払ったカップルはおりません」（資料T-6：ベルール、1789～1792行、50ページ）と語る。

さらに、トマにおいては「皆様方、この物語の異本はいくつも存在しておりますので、必要な物だけを語り、不要な物は取りのけて、まとめ上げました。でも、極端に単純なお話にしたいとは思いません。様々な異本はお互いに食い違っております。プロの物語作者において、とりわけこのトゥリスタン物語作者においては、ここのエピソードは食い違っております。わたくしは、彼らのうちの何人かの語るのを聞きました。それらのうち語られたもの、書かれたものなど異本はいくつも熟知しておりますが、わたくしの聞いた限りでは、ブレリ（BRELI おそらくウエールズ出身の物語作者）の異本に基づいてはおりません。ブレリこそブルターニュに暮らし、すべての王さま、伯爵さまにかかわる英雄的な武勲やその他のお話に通暁していたのです。しかしとりわけ、この作品に関しては、カエルダンの妻が恋したと思われる、この小人の話は、わたくしたちの多くは賛同したくはありません。この小人はカエルダンを殺したとき、トゥリスタンに傷を負わせ、術策をろうして投

獄した。この傷と投獄のせいで、トゥリスタンはイギリスにいるイザーを迎えに、ゴヴェルナルを遣わすことになるのであります。トマはこの話を容認できません。このようなことは絶対あり得ないことを裏付けとなる証拠をもって証明しましょう」(資料 T-7 : トマ、2261~2290行、184-185ページ)と続け、延々と語ったあと、「こうした異本の作者たちは誤りを犯しており、真実から遠ざかってしまっています。もしも、彼らが誤りを認めようとしなくても、喧嘩をするつもりは毛頭ありません。彼らは彼らの異本でご満足なら、わたくしはわたくしの異本を頼りにします。どちらが正しいかは、すぐに分かるでしょう」(資料 T-8 : トマ、2305~2310行、同ページ)。

また最後には、「トマの物語はこれでおしまいです。すべての愛する人達、恋に悩める人達、恋に狂える人達、焼きもちやきの人達、恋に身を焦がす人達、色情狂の方々、性倒錯者の方々、この物語をお聞きになるすべての人達に、トマは別れを告げます。わたくしの物語が、すべての聴衆のお望み通りではなかったとしても、わたくしなりに最善を尽くしました。始めに、お約束申し上げましたように、わたくしの申し上げたことはすべて真実です。粉飾を加えて話を面白くするようにしたひとつの典型を、提供いたしたいと思い、(今まであった)韻文のお話や歌詞を、わたくしがまとめたものです。恋人たちにお気に召していただくために、自分たちの姿を、さまざまなエピソードの中に見いだして、重ね合わせることができると目指したのです。心変わり、不当な仕打ち、恋の悲しみ、恋の苦しみ、恋の落とし穴などに遭遇したとき、恋する人達が、この物語を聞いて、慰め力づけられることができるようにと……」(資料 T-9 : トマ、3279~3298行、212ページ)と、トマは締めくくる。

池田和臣によると源氏物語の表現形式の特異性として、語り手の介入する表現方法「草紙地」の存在理由は次の五つの可能性がある。

「第1に：対読者意識のあらわれとするもの(中野幸一)

第2に：語り手の立場をかりた作者の主体的表現とみるもの(金岡孝)

第3に：古女房の介在によって享受者を作中世界にひき込み臨場させるからくりとするもの(杉山康彦)

第4に：物語される内容の再対象化の文体とするもの（藤井貞和）

第5に：語りの中から作中場面へ投げられた話主の言葉であると形式的に規定するもの（根来司）

等様々である」⁽⁴⁰⁾。

これらは、草紙地を十把一絡げとして意見を取りまとめたものであるが、様々なシチュエーションで微妙に違っているようにも思える。例えば、ベルールが「ああ、神様！」（750行、900行）と、主人公の不運を目の当たりにして叫んだとき、主に臨場感を作り出す草紙地だろうし、「そのうちまた機会がありましたら思い出してお話しすることにいたしましょう、とか言うことでした」（『蓬生』第3巻、207ページ）と言ったときは、主に語り手の立場をかりた作者の主体的表現であり、内容の再対象化であろう。このように様々な場面での草紙地は質が違っているように思われるが、語り手が一番重要視したのは、自分がこの物語の作者ではなく、伝承者なのであるということをも主張するために用いた草紙地であろう。「私はその話を、多くの人から聴いたし、書かれた本で私自身が読んだのです」（5～6行）とマリー・ドゥ・フランスが歌うとき、「ベルールの読んだ種本（エストワール）で、語られておりますところでは」（1789～1790行）とベルールが言うとき、「トマの物語はこれでおしまいです」（3279行）とトマが結語を述べ長い物語を終えるとき、それは、前述した草紙地とは少し違うニュアンスを持つような印象を受ける。ここでマリー・ドゥ・フランスも、ベルールも、トマも自分が語ったことはすなわち、トゥリスタン物語を正しく語る吟遊詩人（トマの場合はブレリ）の本に基づいて、語ったのだということを強調している。源氏物語においてもトゥリスタン物語と同様に、作り物すなわちフィクションではないというたてまえを作者は崩さない。紫式部が最初の巻である「桐壺」の結語として、『『光る君』という名は、あの高麗の観相家が、この君をほめたたえてお付けしたのだと、言い伝えられていますとか』（資料G-7：「桐壺」、寂聴訳、第1巻、41ページ）と書いたり、最終章の「夢浮橋」の最後の最後に、またも「そう本には書いてあるようでございます」（資料G-8：「夢浮橋」、寂聴訳、第10巻、304ページ）と強調するのも、自分が想像でフィクションを作り出

したのではなく、伝承されたノンフィクション物語であるということの聴衆への確認であったろう。そのために語り手の介入がしばしば現れるというのも一つの理由であろうと考えられる。

このように語り手が自分で見聞きしたこととして、後世に事実談を伝えるという形をとっている文体、すなわち「草紙地によって、自己否定の契機を内在している本質的に動的な表現主体の意識の総体が、作中世界に開放され内在化される。そしてその意識の言語的場である草紙地を基軸として表現世界は相対化され、胚胎されていた問題がその語り手の言葉の衝動によりせり上げられ、新たなる主題性として物語世界に織込まれるのであった⁽¹¹⁾」と、池田和臣が源氏物語に関して述べていることは、まったくトゥリスタン物語にも当てはまると言えよう。これらの現象はおそらくこの両物語が単に読まれたものでなく、語られたり歌われたりしたものであることの証明にもなるだろうが、同時に語り手の介在により、語られる物語自体の表現世界の相対化をもたらし、その結果新たな主題性が物語に織り込まれるという極めて重要な役割を果たしているのである。

〔付記〕

本稿は、2000年12月2日東京お茶の水の中央大学において催された、国際アーサー王学会日本支部会に於いて発表された論文に加筆訂正したものです。なお、貴重な資料を快く長期に渡り、提供いただいた、埼玉大学の国文学者萩原昌好先生、明治学院大学の仏文学者天澤退二郎両先生に感謝を捧げたいと思います。

(注)

- (1) 玉上琢彌『源氏物語』第1巻、角川文庫（ソフィア）、昭和39年、11ページ。
- (2) 吉田孝『日本の歴史3——古代国家の歩み』、小学館、1988年、346ページ。
- (3) 和辻哲郎「源氏物語について」（『日本思想史研究』——所収）大正11年。
- (4) 秋山虔「紫式部と源氏物語」『国文学解釈と鑑賞』平成12年12月。
- (5) 武田宗俊「源氏物語の最初の形態——源氏物語をどう読むか」『国文学解釈と鑑賞』別冊、至文堂、昭和61年4月。
- (6) 渡邊浩司『アーサー王伝説トリスタン物語』世界の文学56、第1巻、165ページ。
- (7) G. SCHOEPERLE, *TRISTAN AND ISOLT*, NEW YORK UNIVERSITY, 1913, p. 397.
- (8) 大野晋『思想と文体』、昭和36年1月。
- (9) 佐藤輝夫『トリスタン伝説』、中央公論社、昭和56年、148ページ。
- (10) 池田和臣「源氏物語の草紙地についての一視角」注23、『源氏物語(Ⅲ)文体論表現論』

(国文学解釈と鑑賞別冊)、至文堂、103ページ。
(11) 同上、107ページ。

(参考文献)

源氏物語関係：

瀬戸内寂聴訳『源氏物語』全10巻、講談社、1996—1998年。
玉上琢彌校注および現代語訳付き『源氏物語』全10巻、角川文庫、昭和39—昭和50年。
秋山虔『源氏物語』、岩波新書、1968年。
鈴木日出男編集『文学史上の「源氏物語」』(国文学解釈と鑑賞別冊)、至文堂、平成10年。
池田弥三郎『光源氏の一生』、講談社現代新書、昭和39年。
中野幸一・丸谷才一『源氏物語』、新潮古典文学アルバム、1990年。
秋山虔編集『源氏物語をどう読むか』(国文学解釈と鑑賞別冊)、至文堂、昭和61年。
鈴木一雄編集『源氏物語(Ⅱ) 構想論主題論』(国文学解釈と鑑賞別冊)、至文堂、昭和57年。
鈴木一雄編集『源氏物語(Ⅲ) 文体論表現論』(国文学解釈と鑑賞別冊)、至文堂、昭和57年。
『源氏物語の世界と美』(国文学解釈と鑑賞)、至文堂、平成12年。
鈴木日出男・中村真一郎『枕草紙・紫式部日記』、新潮古典文学アルバム、1990年。
松村博司・阿部秋生『栄花物語・紫式部日記』、角川書店、昭和51年。
宮田和一郎『宇津保物語』(日本古典全集)全5冊、朝日新聞社、1948—1951年。
浦城二郎『宇津保物語』(全現代語訳)全4冊、講談社学術文庫、昭和53年。
吉田孝『大系日本の歴史』3、4、小学館、1988年。
『新潮日本文学辞典』、新潮社、1988年。
『平凡社大百科事典』、平凡社、1984年。

EDWARD G. SEIDENSTICKER, *THE TALE OF GENJI*, VINTAGE CLASSICS EDITION, JUNE 1990.

Tristan 物語関係：

CHRISTIANE MARCHELLO-NIZIA, *TRISTAN ET YSEUT*, BIBLIOTHÈQUE DE LA PLÉIADE, 1995.
EMMANUÈLE BAUMGARTNER, *TRISTAN ET ISEUT*, ÉTUDE LITTÉRAIRES PUF, 1991.
PIERRE JONIN, *LE ROMAN DE TRISTAN*, LIBRAIRIE HONORÉ CHAMPION, 1974.
ANNE BERTHELOT, *TRISTAN ET YSEUT*, BALISES 25, HATHAN, 1991.
JOZEPH BÉDIER, *LE ROMAN DE TRISTAN ET ISEUT*, ÉDITION D'ART H. PIAZZA, 1946.
MICHEL ZINK, *TRISTAN ET ISEUT*, LE LIVRE DE POCHE, LETTRES GOTHIQUES, 1989.
DANIELLE BUSCHINGER, *TRISTAN (EILHART VON OBERG)*, VERLAG

- ALFRED KUMMERLE STUTTGART, 1976.
- DICTIONNAIRE DES LETTRES FRANÇAISES*, LE LIVRE DE POCHE, 1964.
- LE GANT DE VERRE*, PHILIPPE WALTER ARTUS, 1990.
- TRISTAN AND ISOLT*, GERTRUDE SCHOEPPERLE VOL1, 2 (NEW YORK UNIVERSITY) FRANKFURT A. M. JOSEPH BAER・LONDON DAVID NUTT, 1913.
- PIERRE JONIN, *LE ROMAN DE TRISTAN (BÉROUL)*, LIBRAIRIE HONORÉ CHAMPION, 1974.
- PIERRE JONIN, *LES LAIS DE MARIE DE FRANCE*, LIBRAIRIE HONORÉ CHAMPION, 1977.
- M. BENSKIN, Y. HUNT, I. SHORT, *ROMANIA*, 451-452 T.113, 3-4, 1992-1995, pp.289-317.
- F. GODEFROY, *DICTIONNAIRE DE L'ANCIENNE LANGUE FRANÇAISE*, KRAUS REPRINT, 1969.
- 佐藤輝夫『トリスタン伝説』、中央公論社、昭和56年。
- ジョゼフ・ベディエ（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イズー物語』、岩波新書、昭和28年。
- ゴッドフリート・フォン・シュトラスブルグ（石川敬三訳）『トリスタンとイゾルデ』、郁文堂、1976年。
- 小竹澄栄訳『トリストランとイザルデ』、国書刊行会、1988年。
- アッティラ・チャンパイ/ディートマル・ホラント編（高木卓、須藤正美、尾田一正訳）『トリスタンとイゾルデ』〔ワーグナー〕（名作オペラボックス）、音楽の友社、昭和63年。
- 新倉俊一、神沢栄三、天澤退二郎編訳『フランス中世文学集Ⅰ』、白水社、1990年。
- 堀米庸三『中世の森の中で』（生活の世界歴史Ⅵ）、河出書房新社、昭和50年。
- 新倉俊一『中世を旅する』、白水社、1999年。
- 石井美樹子『王妃エレアノール』（朝日選書494）、朝日新聞社、1994年。
- 天澤衆子訳『もの狂いトゥリスタン』、思潮社、1992年。
- 『アーサー王伝説 トリスタン物語』週刊朝日百科 世界の文学56、2000年。
- * 本文及び参考資料の文献は、源氏物語現代語訳は瀬戸内寂聴訳（講談社）（一部玉上訳使用）、原文は玉上琢彌校注（角川文庫ソフィア）、トゥリスタン物語はPLÉIADE版を用いました。

参考資料1

G-1	ひが耳にやありけむ。聞きよくもあらずぞ。	(「野分」第5巻、73ページ)
G-2	(源氏)「過ぎにしもけふ別るゝもふた道に行くかた知らぬ秋の暮かな」 なほ、かく人知れぬ事は苦しかりけりと、おぼし知りぬらむかし。 かやうのくだへしき事は、あながちに隠ろへ忍び給ひしも、いとほしくて、皆もらしとゞめたるを、「など御門の御子ならむからに、見む人さへかたほならず、ものほめがちなる」と、作り事めきてとりなす人、ものし給ひければなむ。あまり物言ひさがなき罪、さりどころなく。	(「夕顔」第1巻、150ページ)
G-3	かゝる人々末々いかなりけむ。	(「末摘花」第2巻、48ページ)
G-4	うたての好みや。	(「紅葉賀」第2巻、69ページ)
G-5	うたてある心かな。	(「胡蝶」第4巻、187ページ)
G-6	かの大武の北の方、上りておどろき思へるさま、侍従が、嬉しきものの、今しばし待ち聞えざりける心浅さをはづかしう思へる程などを、今少し問はず語りもせまほしけれど、いとかしら痛う、うるさくもの憂ければ、今またもついであらむ折に、思ひ出でてなむ聞ゆべき、とぞ。	(「蓬生」第3巻、156ページ)
G-7	光る君といふ名は、こまうどのもで聞えて、つけ奉りける、とぞ言ひ伝へたる、となむ。	(「桐壺」第1巻、149ページ)
G-8	とぞ、本にはべめる。	(「夢浮橋」第10巻、218ページ)

REPÈRES HISTORIQUES	TEXTES CONTEMPORAINS
1137 Règne de Louis VII de France. 1152 Aliénor d'Aquitaine, répudiée par Louis VII, épouse Henri Plantagenêt. 1154 Henri Plantagenêt devient Henri II, roi d'Angleterre.	1137 <i>Historia regum Britanniae</i> , de Geoffrey de Monmouth. 1155 <i>Roman de Brut</i> , de Wace. = 1165 <i>Érec et Enide</i> , de Chrétien de Troyes. = 1173 <i>Tristan</i> , de Thomas d'Angleterre. = 1175 <i>Tristrant</i> , d'Eilhart von Oberg. = 1176 <i>Lais</i> , de Marie de France (dont <i>Chievrefoil</i>). <i>Cligés</i> , de Chrétien de Troyes. = 1180 <i>Folie d'Oxford</i> . = 1185 <i>Tristan</i> , de Béroul. <i>Conte de Graal</i> , de Chrétien de Troyes. = 1200 <i>Folie de Berne</i> . = 1210 <i>Tristan</i> , de Gottfried von Strassburg. = 1226 <i>Tristrans saga ok Isöndar</i> , de frère Robert. 1225→1230 <i>Tristan</i> en prose.
1180 Règne de Philippe-Auguste.	
1226 Règne de Saint Louis (IX).	

(出所) Anne Berthelot(1991).

参考資料 3 (1)

T-2 Asez^b me plest e bien le voil,
Del lai qu'hum nume chevrefoil,
Que la verité vus en cunt,
⁴ Pur quei fu fet, coment e dunt.
Plusurs^c le m'unt cunté e dit
E jeo l'ai trové en escrit
De Tristram e de la reine^d,
⁸ De lur amour ki tant fu fine^e,
Dunt il eurent meinte dolur,
Puis en mururent en un jur.

T-3
Ha ! Dex, quel duel que la roïne
N'avot les dras du lit ostez !
⁷⁵² Ne fußt la nuit nus d'eus provez.
Se ele s'en fußt apensee,
Mot eüst bien s'anor tensee.
Mot grant miracle Deus i out,
⁷⁵⁶ Quis garanti, si con li plot.

T-4
⁹⁰⁰ Par Deu, trop firent que vilains !

T-5
Li conteor^b dient qu'Yvain
Firent nier, qui sont vilain ;
N'en sevent mie bien l'estoire,
¹²⁶⁸ Berox l'a mex en sen memoire,
Trop ert Tristran preuz et cortois
A ocirre gent de tes lois.

T-6
La ou^c Berox le vit escrit,
Nule gent tant ne s'entramerent
¹⁷⁹² Ne si griment nu conpererent.

(出所) PLÉIADE (1995) 版.

T-7
 Seignurs, cest cunte est mult divers,
²²⁶² E pur ço l'uni par mes vers^g,
 E di en tant cum est mester,
 E le surplus voil relessier.
 Ne vol pas trop en uni dire :
²²⁶⁶ Ici diverse la matyre
 Entre ceus qui solent cunter
 E de le cunte Tristran parler,
 Il en cuntent diversement.
²²⁷⁰ Oï en ai de plusur gent,
 Asez sai que chescun en dit
 E ço que il unt mis en escrit.
 Mé^a sulun ço que j'ai oï,
²²⁷⁴ Nel dient pas sulun Breri,
 Ky solt lé gestes e lé cuntes
 De tuz lé reis, de tuz lé cuntes
 Ki orent esté en Bretaingne.
²²⁷⁸ Ensurquetut, de cest ovraingne,
 Plusurs de noz granter ne volent
 Ço que del naim dire si solent,
 Ke^b femme Kaherdin dut amer ;
²²⁸² Li naim redut Tristran navrer
 E entuscher^c par grant engin,
 Quant ot afolé Kaherdin.
 Pur cest plaie e pur cest mal
²²⁸⁶ Enveiad Tristran Gubernai
 En Engleterre pur Ysolt.
 Thomas iço granter ne volt,

T-8
 Il sunt del cunte forsveié^d
²²⁰⁶ E de la verur esluingné.
 E se ço ne volent granter,
 Ne voil vers eus estriver :
 Tengt le lur e jo le men,
²³¹⁰ La raisun s'i provera ben !

 T-9
 Tumas fine ci sun escrit ;
³²⁸⁰ A tuz amanz saluz i dit,
 As pensis e as amerus^a,
 As emvius, as desirus,
 As enveisiez, as purvers,
³²⁸⁴ [A tuz ces^b] ki orunt ces vers.
 [S]i dit n'ai a tuz lor voleir,
 [L]e milz ai dit a mun poeir.
 [E dit ai] tute la verur
³²⁸⁸ [S]i cum] jo pramis al primur.
 E diz e vers i ai retrait,
 Pur essample issi ai fait
 Pur l'estorie embelir,
³²⁹² Que as amanz devei plaiser,
 Et que par lieus poissent trover
 Choses u se poissent recorder.
 A veir em poissent grant confort
³²⁹⁶ Encuntre change, encuntre tort,
 Encuntre paine, encuntre dour,
 Encuntre tuiz engins d'amur^c.

(出所) PLÉIADE (1995) 版.